加盟校の幸福度ランキングアップ《植物園編》

［武蔵野大学］

「慈悲のこころ」を醸成するお宝の場所づくりに

市瀬浩志　武蔵野大学薬学部教授　薬学部附属薬用植物園園長

1　植物園設置の経緯と特徴

本学の前身、武蔵野女子学院は、築地本願寺境内から1929年に現在の西東京市校地（2012年の有明キャンパス開学後は、武蔵野キャンパスに改称）に移転し、武蔵野女子大学（1965年）を経て、2003年に武蔵野大学と改称し、2004年に全学共学化した。この際、薬学部を開設するのに併せて、附属薬用植物園を設置した。約3万坪の武蔵野キャンパス内には1万1000本の植栽があるが、仏教関連の植物で薬用として知られるもの（甘茶、紫陽花、菩提樹、芭蕉、南天など）がある一角があった。大学図書館には、仏教と植物に関する蔵書も多数あり、聖武天皇の遺愛品とともに正倉院に納められた薬物（正倉院薬物）に関する調査研究をまとめた大型の図説本も含まれていた。正倉院への薬物献納を行った光明皇后は、貧しい病人に施薬や施療を行うために施薬院（せやくいん）を創設したことでも知られることから、本学薬草園の中核として、仏教・正倉院薬物関連の第1・第3薬草園を整備した（写真）。医薬品の公定書である日本薬局方に収載される生薬の基原植物見本園（第2薬草園）と、香粧薬学系の必修科目を意識したハーブ類を中心に集めた第4薬草園を加えて、各園が薬学部の入る建物を囲むように配置されている（4分園全体としての面積は約300坪、植栽は67科184種、2020年5月現在）。

玉川上水を水源として江戸時代に整備された千川上水は、本学正門の脇に位置しており、現在は東京都の清流復活事業により水辺と遊歩道が整備されている。10分ほど遊歩道を歩くと、多摩湖自転車歩行者道の起点があり、ここからさらに10分進めば、桜の

第３薬草園から第１薬草園をのぞむ

名所で知られる広大な（本学の8倍）都立小金井公園を経て、約10キロの直線道路が多摩湖まで続いている。

2 人々の集いや「こころ」と向き合うお宝の場に

薬草園はキャンパスへの来訪者に広く開放されている。武蔵野キャンパスには、大学附属の中学校・高等学校・幼稚園が併設されている。常連の来園者は、お散歩で訪れる幼稚園生であり、7階にある園長の居室からは好奇心旺盛な園児の微笑ましい姿が垣間見える。

薬草園として整備している部分はわずかだが、キャンパス全体が植物にあふれている。正門から続く銀杏と黒松の並木の中には、山桑の大木があり、「先住土着木」の銘板が設置されている。武蔵野キャンパスの土地は、山桑が2本だけ生えた原野であったとする記載があり、本学の草創期を彷彿とさせる記念木となっている。この木をはじめ、キャンパス内の3本の樹木が「西東京市の木50選」として登録され、市民にも親しまれている。

本学の薬学部は、仏教系大学では初めて設立され、アドミッションポリシーに「基本的な薬学知識に加え、医療人として慈悲の心をもった、創造力豊かな実践力のある薬剤師を育成すること」を掲げている。1年生の建学科目「仏教概説」をはじめ、生命倫理に関わる必修科目を各学年に配して、倫理観を涵養する環境としての本学キャンパスの設えは理想的なものであり、薬学生が「こころと向き合うお宝の場所」として、薬用植物園を活用してもらうことを大きな目標としている。

3 さらなる活用を目指して

本学はブランドビジョンとして「世界の幸せをカタチにする。」を標榜し、人々の「感性」「知恵」「響創力」を高めることを目指している。2020年度現在、本学の11学部では、国連の持続可能な開発目標（SDGs）の中から具体的な目標を掲げて活動を展開している。薬学部では併設される薬学研究所とともに、SDGs目標3「すべての人に健康と福祉を」の活動として「薬学系統合企画」を展開している。地域貢献にも力を入れており、武蔵野市と武蔵野地域の五大学（本学ほか四大学）が連携して提供する、高度で継続的、体系的な生涯学習の場「武蔵野地域自由大学」に参画しており、2019年度には「薬とは?」という15回のオムニバス講義を開講した。初回講義では、園長による薬草園を活用した講義を実施するなど、対外的な植物園の利用の工夫を続けている。今後とも、学内外の方々の幅広いご利用をお願いしたい。

加盟校の幸福度ランキングアップ《植物園編》

［西南学院大学］

聖書で出会った植物とキャンパスで出会う
―西南学院大学聖書植物園―

小林 洋一　西南学院大学名誉教授

歴史的に「カナン」、「イスラエル」、あるいは「パレスチナ」と呼ばれてきた聖書の地は、日本の四国程度の狭い地域ではあるが、地形や気候は変化に富み、北東の山岳地帯の高山植物から、南の乾燥地帯の砂漠植物に至るまで2800種以上の多様な植物が生育しているとされる。そのうちの100種を超える植物が聖書に登場する。

これらの聖書の植物を可能な限りキャンパス内に収集・復元しようと、1999年11月13日、「西南学院大学聖書植物園」が開園した。この聖書植物園は、大学開学50周年記念事業として大学同窓会の寄付金を基に造られたものである。当初は12本の樹木でスタートしたが、20年後の現在、その展示植物は約100種を数えるまでになっている。

この植物園の特徴の1つは、聖書の植物がキャンパスの一角ではなく、キャンパス全体に広がって植えられていることである。そのため、見学者はマップ付きの聖書植物園冊子を片手に、キャンパスを行きめぐり、聖書の植物を訪ね歩くことになる。一般にも公開されており、ホームページなどを見て遠方より訪ねてくださる方も多い。

さて、聖書は今から約2000年前の古文書なので、聖書の植物を復元するというこの聖書植物園の試みは、「緑の考古学（Green Archaeology）」（イスラエル国の聖書植物園「ネオート・ケドミーム」の用語）とでも言えると思う。しかし、2000年前の植物を同定することは決して容易なことではない。古代には現代のような植物分類学が発達していなかったためである。

たとえば、ノアの箱舟の建材「ゴフェルの木」（創世記6章14節、聖書ではここだけにしか出てこない）とはどのような木なのか。あるいは老人を象徴する「アビヨナ」（コヘレトの言葉12章5節）とは、一体どのような植物なのか。疑問と興味は尽きない。

聖書に登場する植物の同定の困難さは、日本語聖書の翻訳語からもうかがい知ることができる。植物園の展示植物の表

示板には、当該植物が日本聖書協会発行の『聖書』(1955年、以下「口語訳」)と『聖書　新共同訳』(1987年、以下「新共同訳」)では、異なる植物名の訳がなされている場合がある。その場合、双方で訳出された2つの異なる植物も展示することにしている。そのためこの聖書植物園には、聖書の地にはない日本自生の植物も加えられている。たとえば、旧約聖書の原語であるヘブライ語の「アルモーン」(エゼキエル書31章8節)を、口語訳は「けやき」と訳出し、新共同訳は、「すずかけの木」(プラタナス)と訳出している［新しく出た『聖書　聖書協会共同訳』(2018年)では「プラタナス」］。そのような場合には、「けやき」と「プラタナス」の両者を展示し、それぞれの表示板には訳の差異も表記している。それにより、見学者は、日本語聖書の訳があくまでも相対的なものであることを学ぶことになる。その意味で、この聖書植物園は、現地にあるものだけという厳密に限定された意味での「聖書植物園」ではなく、植物の同定あるいは聖書翻訳の困難さをも明示する聖書「翻訳」植物園的特徴を有している。

　聖書植物園といっても、その管理運営に常駐の担当者がいるわけではなく、現在、その維持管理はガーデニングの専門業者の手助け、福祉作業所からの草取りのアルバイト、学生による水やりのアルバイト、さらには市民、OG、OB、学生、教職員による月1回の草取りボランティアなどによって担われている。

　数年前、聖書植物園の17年に及ぶ管理・運営を総括する意味で『聖書植物図鑑』(2017年)を出版した。この書の最大の特徴は、聖書の地ではなく、福岡の地の大学キャンパス内で植栽されている植物が収録されていることである。したがって、植物の写真も、すべて大学キャンパスで撮られたものである。好評を得て、2019年に第2刷を発行した。

　写真は、2016年の西南学院創立100周年を記念して本館前に植樹された発芽から14年目のレバノン杉である。レバノン杉は3000年以上の樹齢を誇るものもあり、その経済的価値、美しさ、大きさ、力強さから旧約聖書での言及も多い(40回以上)。前述のノアの箱舟の「ゴフェルの木」は、レバノン杉あるいは糸杉の可能性が高い。

14年目のレバノン杉(本館前)

加盟校の幸福度ランキングアップ《植物園編》

［東京農業大学］

自然の移ろいを感じ、自然を学ぶ

小川 博　東京農業大学農学部長

1　農学部植物園の概要

本園は１９４７年に現在の世田谷キャンパスに開設された有用植物園を前身とし、１９６７年に現在の厚木キャンパス内に厚木農場と共に開設された。その後、２０１２年に農場機関は伊勢原農場に移転したが、植物園は農学部の付属施設として厚木キャンパスに残された。現在は厚木キャンパス全体を植物園として捉えるようにもなっている。

現在は農学部の主目的である生産農学と新領域である環境農学および生活農学の教育理念に基づき、絶滅に瀕している植物の保護や、有用植物および貴重な資源植物を収集、保存、展示し、教育および研究に利用されている。本園には温室２棟と屋外圃場（ほじょう）があり、約２０００種の有用植物および貴重な資源植物の収集・保存を行っており、中でもアジアの熱帯産ショウガ科植物、熱帯果樹などの資源植物、また、ホシクサ科およびイグサ科をはじめとする国内の希少植物を保護すると同時に、日本古来より親しまれてきたツバキ２００品種、サクラソウ１５０品種、アジサイ１００種類、ギボウシ50種類をはじめウメ、サクラなどの伝統園芸植物を栽培・管理している。また、キャンパス内には４１８種類の自生植物が生育しており、カタクリやニリンソウ群落が残る雑木林も保全され、これら野生種も栽培・管理している。

2　教育活動への対応と情報発信の取り組み

厚木キャンパスには農学部があり、その1年次の学科共通の必修科目「農業実習」では、６００人ほどの学生が植物園を利用してキャンパスにある植物から自然の在り方と資源植物の保全・利活用について学んでいる。また、農学部の学生が農用作物を含めた植物に対する知識とそれぞ

れの持つ価値と意義について学ぶ場として活用されている。1993年には神奈川県教育委員会から博物館相当施設の指定を受け、学術情報課程4年次の「博物館実習」で利用されているほか、4年次の「卒業論文」で利用する者もあり、学生の様々な教育活動の場として利用されている。

本園では、学内外の来園者へ植物の説明などの対応をしたり、学内での植物展示会（サクラソウ、アジサイ、ギボウシ、ツバキ等）の開催や、学外展示への協力をしたり、また、『植物園だより』として開花情報や結実情報など、植物に関する情報を大学ホームページなどで発信してきた。さらに、キャンパス内の植物に名札を設置して、学生への植物の関心を高めるための活動も行ってきた。

また、これらの自然環境を身近なものにするために、それぞれの木の特徴と民俗的な関わり、学名の読みと意味、さらに命名者の解説も付記した『自生樹木図鑑』と、キャンパス内で観察できる薬木100種について樹木の持つ薬効などを付記した『薬木図鑑』を作成し、ホームページで閲覧できるようにしている。

3　学生たちの活動と今後の展望

学生のクラブ活動として「厚木植物研究会」があり、所属する30人ほどの植物好きの学生が園内やキャンパス内の植物を観察したり、自ら持ち込んだ植物を育てたりするなど、植物園を拠点に活動している。現在は新型コロナウイルス感染症対策のため一般の方はもちろん学生の活動も制限を余儀なくされているものの、通常であれば毎日4～5人の学生が常駐し、植物の管理や潅水作業、展示会の準備などで植物園の維持・管理に貢献しているほか、一般の来場者に植物やその管理の仕方などについて説明しながら、地域の方々との交流も行っている。

今後、学生実習で利用することはもちろん、学生や地域の方々が、自然の重要性と自然環境の保全が持続的な生物多様性にとって重要であることを学べる施設として、さらに充実させたいと考えている。

『自生樹木図鑑』と『薬木図鑑』